

# 一茶の写声語に関する考察 (一)

小嶋 孝 三郎

一、まえおき

さきに私は「一茶と写声語」と題する小稿を発表した（『論究日本文学』第五号）。その論稿では一茶が諸他の俳人に比して特に写声語の使用に長けており、頗る軽快な用法がみられることを指摘した。しかし、そこでは調査の資料が十分でなかった関係もあって、殆ど概括的な試論に止まった。小論では、一茶の作風が時代とともによつて成長発展し、彼の個性と写声語の使用とが、果してどのように結びつくかという問題を、その生涯に亘る全作品を検討することによって、究明しようとしたものである。

註、こゝにいう写声語とは、擬声語（擬音語）、擬態語（擬容語）並びに象徴語（語原的には擬声・擬態いづれにも属しないが、その形態・意味・職能よりみて同一範疇に属すると考えられる語）の総称とする。

## 二、伊藤正雄氏の説

彼の句には擬声語や擬態語が自在に用いられて居るのが目に付く。之には低劣でナンセンスなものもあるが、擬声語、擬態語が非常に印象的に用ひてある為に、一句を生かして居る例も少くない。

い。

大虫ゆらりゆらりと通りけり  
ちま、ちまとした海持ちぬ石露の花  
ほ、ちや、ほ、ちやと雪にくるまる在所哉

擬声語、擬態語は言語の最も原始的なるもので、嬰兒の言葉や、未開人の言葉がさうである。彼がこの種の語を頻りに使用した事実は、やはりその児童的性格と相関聯するものと言へよう。

（中略）彼が擬声語、擬態語や疊語疊句を好んで使用したことは、確かにその作品に児童性を反映したものと云ふべきであつて、それは表現の自由軽快を發揮し得たと共に、無造作な即興吟の濫作に陥らざるを得なかつたのである。（伊藤正雄著「小林一茶集」二一―二二頁。なお同氏著「小林一茶」（三省堂）にもほぼ同様の見解が見られる。）

右の伊藤氏の説は、要するに写声語を用いた一茶の句の中には自由軽快な秀句も見られるが、無内容な即興句も多いこと、及び写声語が本来原始的なものであり、児童や未開人の言語によく使われる点をあげ、一茶におけるこの種の用語を児童性の反映と断ずるので

ある。

此の説を肯定する為に、例えば  
どんど焼どんど雪の降りにけり（文化十五年、七番日記）  
のような童謡的発想の句や、  
むまさうな雪がふうはり／＼と（文政版、一茶発句集）

のような一茶の童心が躍如としてゐる句を探してみた。更に又、一茶のこの種語彙に対する頗る「無造作」な用語ぶりや、「低劣でナンセンス」と評されるような句を調査してみた。すると、  
瓜西瓜ねん／＼ころり／＼哉（文化十三年、七番日記）  
朝顔の花やさら／＼さあさら（文政四年、八番日記）  
とをんとんとんとしくちり火花哉（〃、〃、〃）  
ぐろにやんと猫も並ぶや衣配（〃、六年、九番日記）  
蚤ひよい／＼／＼達者じまん哉（〃、八年、文政八年句帖）  
梧一葉後はくわら／＼クハアラ／＼（〃、〃、〃）

などにみられるように、約二万句という膨大な量にのぼるその終身の作品から、この種の用例を悉く拾いあげるならば、それこそ夥しい量にのぼることが解った。

しかしながら、凡そ一茶の俳句たるや、芭蕉や蕪村の場合とは全然比較にならない程資料の多いことと、その作家生活約三十年といふ長い年月に亘る彼の生活詩が、その壮年期から中年期へ、更には老年期の晩年にかけて大きな変遷を遂げていること、しかもそれらを精査するとき彼の個性がその作風の発展とともに漸次成熟しつゝ、この種語彙も又大きな消長発展を遂げていることを考え合わせると、私は右にあげた伊藤氏の評言にかなりの修正を施さなければなら

らないと思うのである。

## 三、時代別考察

現存する一茶の資料は「一茶叢書」によつてほぼまとめられている。一茶の作家生活約三十五年は、殆ど句作にあけられてゐるが、その生涯に亘つて書き綴られた句日記の殆ど全てが現存することは、吾々研究者にとつてまことに心強い。

ところで、一茶の生活とその作風を大きく時代別に表にしてみると、次のように、寛政時代・享和時代・文化時代前期・文化時代後期（附文政二年）・文政時代（文政三年以後）となる。

- 註1、資料とした日記句帖所載の句中、同一句で再三収録されているものは、すべて初出のものに限つて計算の中に入れた。
- 2、百分比は少数点以下すべて四捨五入して計算してある。
  - 3、なお左の表からは「旅拾遺」「さらば笠」「父の終焉日記」「花見の記」「三韓人」「大吹」「まん六の春」等を省略した。それらはいずれも散文や連句を主としており、各十句以内でもあり、特に比率をあげるほどのこともないと考えたからである。
  - 4、文政二年は一茶が「八番日記」を書き始めた年であり、名

著「おらが春」をものして、一茶文学の頂点を示している時期でもある。これを文化時代後期に入れてよいかどうかは未だ問題を残しているが、作風並びに写声語を用いた句数の比率等を考え合わせて論述の都合上そうしたのである。今、参考資料を除いて、句帖を中心にその量的消長の跡を辿ってみると、寛政時代は三五句中僅かに二句、比率にして約〇・五%

	年号	年齢	句数	写 声 語 を 用 いた 句 数	百分 比 %	資 料 名 (日記句帖名)	備 考	
							その他の参考資料	百分比(%)
寛 政 時 代	寛政	329					寛政三年帰郷日記	0/29 (0)
		430	105	0	0	寛政句帖		
		531	99	0	0	"		
		632	61	2	3	"		
		733	86	0	0	寛政紀行	(紀行書込) (連句稿)	14/178 (8) 6/126 (5)
		834						
		935						
		1036 1137 1238						
享 和 時 代	享和元 240 341		756	40	5	享和句帖		
文 化 時 代 前 期	文化元	42	823	36	4	文化句帖		
		243	664	35	5	"		
		344	575	25	4	"	文化句帖補遺	19/249 (8)
		445	231	13	6	"		
		546	230	18	7	"		
文 化 時 代 後 期		647	216	18	8	文化六年句日記 七番日記		
		748	664	51	8	"	我春集 株番良	11/38 (8) 13/200 (7)
		849	430	37	8	"	志多良 句稿消息	16/234 (7) 48/639 (8)
		950	703	55	8	"		
		1051	1160	79	7	"		
		1152	1054	110	10	"		
		1253	755	64	8	"		
		1354	899	103	11	"		
		1455	556	63	11	"		
		文政元 56 257	936 914	93 86	10 9	" 八番日記	{おらが春(文政二) 文政二年句帖うし だん袋	23/232 (10) 5/64 (8) 10/174 (6)
文 政 時 代		358	816	43	5	"		
		459	1304	93	7	"		
		560	1256	67	5	九番日記		
		661	531	34	6	"		
文 政 時 代		762	1125	81	7	"		
		863	709	71	10	文政八年句帖		
		964					文政九年句帖うし 文政十年句帖うし	12/100 (12) 3/56 (5)
		1065						
合計			17656	1317	7%強			180/2419 (7%強)
総計						1497/20075		7.4%

という低率である。これに対して、享和時代の七五六句中四〇句、及び文化時代前期の二五三句中一二七句がいずれも約五%の比率を示し、次いで文化時代後期が八二八七句中七五九句で九%強と最も高率をあげている。ところが文政三年以後になると五七四一句中三八九句の七%弱と漸く低下を示しているのである。さて一茶のこうした各時代による写声語使用の頻度を、更に語彙の質的な面並びに表現価値の面から考察してみても、それが彼の作風と果してどのように関連するかを究明して行こう。

イ、寛政時代

先ず第一期は寛政時代である。現存する一茶の資料の中で、最も古いものは「寛政三年帰郷日記」である。こゝでは全部で二九句見られるが、写声語を用いた句は皆無である。勿論、その日記の文中には、

……枕にすがりて、とほ／＼かへる門には、木の上の草のごとく  
ひよろ／＼と瘦おとろえて、……  
……山は／＼と鳴り、地はゆら／＼とうごきて、日をふれど  
も止まず、……

といった表現が随処にみられる。

次に「寛政句帖」であるが、こゝには「ちら／＼」「うら／＼」の二語を見出す。尤もこの二語はこの句帖の一番終りのところに並んだ次の二句に用いられている。

灯ちら／＼瘡瘡小屋の吹雪哉(寛政六年)  
葉うら／＼灯影とどかぬ里神楽( )

共に二音節反復の疊語で、極めて平凡な用語である。

右の句帖に次いで同七年には「寛政紀行」を出している。こゝでも写声語の使用は皆無であるが、こゝで特に注目されるのは、この句帖の「書込」である。それはいずれも未定稿とみられるものであり、季節のないものや、句形の整っていないものもかなり多い。今それらのものも含めて、とにかく写声語を用いているものを数えらると、全部で一四句もあり、その全句数との比率は八%という高率になっている。表向きの句にはたゞの一語も用いずに、未定稿に限ってこのような高い比率をみることは、たしかに問題であろう。これは一体如何なる理由によるものであろうか。

このことに関しては、次の「書込」が実に興味あるものである。

俗語 ツヨクつヲモテ云  
浅アツサ 浮ウツカリ 堅カッター わっさり  
ウツソリ ○ハタ ハッター ○ヒタト ヒッター  
○ホコヤカ ホッコリ ○キハタリ ヲキツバリ  
○ザブリ ザンブリ

右は促音便の語をたゞ雑然と記載したものに過ぎないが、最後の一語は撥音便であり、実にあやしげな語学者ぶりを發揮している。たゞこゝで注意しなければならないのは、これらの語をはっきり「俗語」と銘記していることである。このことは、「書込」に一四句も写声語を用いながら、いずれも未定稿として表向きには出していないことと何等かの関連を有するのではないか。

しかも、この「紀行」中の一茶の用語は、遠乗やあらたばしる笠の上(寛政四年)

君が代や旅にしあれど筒の雑煮（五年）  
猪小屋や幾夜寝さぬ人の声（六年）

などの句がよく証明しているように、古典和歌の辭句を引用した句が、他の時期に較べて最も多い時代である。

以上によって寛政時代の一茶の写声語について云えることは、その作品において彼の個性が殆ど見つけられないのとよく符合している。こゝでは写声語の使用が極力抑制されているかのようである。

その句作態度においても、万葉・古今・新古今等の古歌の文がそのまま引用されていることは、古語や雅語を尊重する態度であり、このことは取りも直さず写声語を俗語として或程度まで敬遠していたのではなからうかと推測されるのである。

#### ロ、享和時代

享和時代の一茶は「享和句帖」によってうかがうことが出来る。しかもこの時期はいわゆる一茶調の萌芽期と云われている。こゝでは果して写声語をどのように用いているであろうか。

「句帖」の享和三年四月十三日のところに、  
ひよろ／＼と萩に立添ふ鹿子哉 土朝

の句が記されている。土朝というのは、いうまでもなく尾張の井上土朝で、当時は京の江森月居、江戸の大島完来らと共に最も声望の高かった俳人である。ところが、右の句が所載されている個処から約一週間後の四月十九日の条に、

しの竹のひよろ／＼暮る穂麦哉

という句があり、又、六月廿八日には

虫除の札のひよろ／＼かれの哉

子鼠のちよと啼や夜半の秋（蕪村）

を比較すると、これも無関係でない。何故なら、右の用法は掛詞として用いられており、後代の一茶にはこうした用例が殆ど見られないのである。大体この写声語の掛詞の用法については、芭蕉や蕪村にその用例が多いが、例えば、

たかうなや雫もよゝの篠の露（芭蕉）

入道のよゝとまゝいぬ納豆汁（蕪村）

のように、同じ写声語を用いても古典的感覚（源氏物語、徒然草等に用例あり）で垢ぬけしたものが感じられるが、一茶の場合は未だ稚拙で粗笨な印象をうける。それでも、

ざぶり／＼／＼雨ふるかれ野かな（十日十三日）

に見るような平直且つ大胆な表現のあることも見逃すことは出来ない。枯野の冬を洗い流すような強い雨の音が、それでいて何か暖かい春の近づいていることを感じさせるような描写である。

以上、この期の一茶は依然として写声語を真に自己のものたらしめるだけの言語感覚に欠けるものがあり、未だこれを俗語としてその使用を抑制したのか、かなり消極的とみられる。尤も中には「ふんぞりかへる」「つん出ず」等のような俗語的表現も散見するが、寧ろ先人や大家の用語を確認した上か、さもなければ古典の用語に依存している。従って、この期の一茶は全く習作期とみられ、僅かに享和三年十月に入って殆ど集中的に用いられている写声語に、漸く次代の個性的な用法の萌芽がうかがわれると云った程度である。

註、この点については、前記「一茶と写声語」で少し詳しく述べておいた。

という句が記載されている。この「ひよろ／＼」はさききあげた「寛政三年帰郷日記」の文にも用いられていたが、作句の上ではこれが最初である。従って、このことは要するに、当時の大家土朝の用語を確認した上で、これなら安心して使えると云ったような、臆病と云おうか手堅いと云ったらいのか、随分慎重な態度が想像されるのである。

大体、この期における一茶の写声語に対する言語感覚は、果してどのようなものであったらうか。

べそ／＼と花火過けり角田河（七月十二日）

日中にどたりばたりと砧哉（十月二日）

「べそ／＼と」については、前記「帰郷日記」にも「べそ／＼となきぬ」という表現があるが、この用語はかなり特異である。次の句は、風流な砧の音も昼日中に聞いているは興ざめたであろう。これは恐らく蕪村の、

おちこちおちこちとうつ砧かな

の句を頭に入れて詠んだものであろう。その傍証として、

流れ木のあちこちとしてし暮れぬ（八月九日）

の句が、蕪村の

うぐひすのあちこちとするや小家がち

の用法を模倣していることがあげられる。「あちこちとして」は「あちこち」という観念語を象徴語として擬態語のように使った特殊な用語である。そのような特殊の用法が偶然的の符合とも思えぬ。

又、次の両者、

露しもや丘の雀もちよとよぶ（八月十日）

#### ハ、文化時代前期

文化時代に入ると、一茶も漸くその個性を發揮し始めている。

板塀に鼻のつかへる涼哉（文化二年、文化句帖）

心から信濃の雪に降られけり（四年）

あら玉や年立かへる風哉（五年）

等の句が物語っているように、江戸では「椋鳥と人と呼ばれる、寒さ」や、「涼風の曲りくねって来」る夕涼みの生活に苦しみ、そう

かと云って故郷に帰れば、「寄るもさはるも夜の花」「蠅まで人をさしにけり」で、つくづくと「我には翌のあてはなき」と嘆く。それでも「梅が香や」「わが春や」で、あら玉の「年立かへる風」とともに暮しているのである。人間的なあくの強さ、強烈な自我、徹底した現実主義、そうしたものがこの期の一茶に顕著になっている。

その作品を未熟とか粗野とかと云って簡単に葬りされないのは、そうした強い個性をもった云わば民芸の味であろう。

艸蔭にぶつくさぬ。かす蛙哉（文化二年、文化句帖）

作者のあらわな感情が「ぬかす」という表現に強く反映している。「ぶつくさ」という写声語もこうした表現と相まって見事に生かされていると云えよう。

一茶のこの期の写声語を形態的にみると、やはり疊語（音節反復型）が最も多く、従って次代にみられるような多彩さは未だ現われていない。

艸山のくり／＼はれし春の雨（文化元年、文化句帖）

ぼつ／＼と馬の爪切る野分哉（ ）

ひよい／＼と瘦菜花咲く日永哉（二年）

春雨や家鴨よち／＼門歩き ( ) " " " ( )  
ほちや／＼と藪葬の咲にけり ( ) " " " ( )  
ぼちや／＼と鳩の太りて日の長き ( ) " " " ( )  
これらの語は同じ写声語の中でも最も単純なものであるが、右の諸句にみられる用語はかなり効果的である。田園の風趣をよく写生し得ていると云えよう。

みそさゞいちつといふても日の暮る (文化元年、文化句帖)  
鶯のずつり濡れし根根哉 ( ) " " " ( )  
げつそりと鴈はへりけりよしづ茶屋 ( ) " " " ( )  
星比はくつともいはぬ蛙哉 ( ) " " " ( )  
右はいずれも促音を有する形態の語を用いている。一茶は、これらの写声語が、よく鳥獣虫魚の生態の語を用いている。一茶は、これ心得ていたと云えよう。尤も、右の用語はいずれもかなり主観的な把握による効果を發揮し得ている。

なおこの時期で一つ附け加えておきたいことは、既に享和期でも見られたことであるが、彼の句に蕪村ら先人の句を踏まえているとみられるものが散見することである。例えば  
大とこの糞ひりおはすかれ野哉 (蕪村)  
の句が一茶では、

僧正の野糞遊ばす日傘哉 (文化元年、文化句帖)  
となり、また  
地車のとゞろとひやく牡丹かな (蕪村)  
地車におつびしがれし董哉 (文化元年、文化句帖)  
といった具合で、

# 論究日本文学 総目次

(創刊号——第十号)

(題名)	(執筆)	(号)	(頁)	(頁数)
平安朝における「うるはし」の展開物語の祖	犬塚 且	V	1	32
竹取物語の面白さ	清 水 泰	V	1	4
桐壺の巻「参りては」の疑義	南 波 浩	VI	6	4
寝覚・浜松の成立順序に関する旧説の批判	清 水 泰	II	1	3
中村本夜寝覚物語巻一における改作について	鈴木 弘道	III	1	13
とりかへばや物語と後代文学	鈴木 弘道	IV	13	22
——柳亭種彦「奴の小万」との比較	鈴木 弘道	創	68	9
とりかへばや物語と外国文学	鈴木 弘道	創	51	8
李花亭文庫本堤中納言物語	土岐 武治	創	34	14
岩崎美隆旧蔵本	土岐 武治	II	55	13
「堤中納言物語」について	土岐 武治	II	55	13

穂久邇文庫蔵	土岐 武治	V	24	8
堤中納言物語「について」	土岐 武治	VII	41	10
堤中納言物語「蟲めづる姫君」考	土岐 武治	X	56	4
——平安朝成立説の再検討	大橋 清秀	創	22	12
堤中納言物語「はなだの女御」題名考	大橋 清秀	IX	6	7
和泉式部日記書名考	大伴 寿男	VII	33	8
和泉式部の歌と同時代の文学	岡本 彦一	創	47	9
古今集の性格句——題歌・屏風歌・物名歌を中心として	岡本 彦一	IV	35	14
×	岡本 彦一	VIII	19	8
×	味方 健	III	22	12
近世	水田 潤	創	56	12
西鶴雑話ものの性格	水田 潤	創	56	12

花いばら故郷の路に似たる哉 (蕪村)  
故郷は寄るもさはるもばらの花 (一茶)  
の二句が両者の差、否差などというものではなく水と油、雲と泥の違いをよく物語っている。唯美ロマンの蕪村の句境とは凡そ似てもつかない一茶の現実主義は、それを俗悪とか悪趣味とかと云ってみたところで蛙の面に水であらう。蕪村の「とゞろとひやく」は、実感を描写するのにさへ古典語を使用しており、「おつびしがれし」という俗語使用の一茶との違いが写声語による表現面にもよく現われている。「離俗」と「超俗」との相違と云いたい。

但し、これを次代の  
ほち／＼と雪にくるまる在所哉 (文化九年、七番日記、句稿消息、  
発句集「ほちや」)  
が、文章の  
ほた／＼と朝日さし込火燵かな (文章発句集)  
の用語や、惟然の  
ゆったりと寝たる在所や冬の梅 (惟然坊句集)  
の境地を超えて、よく自己の境地まで磨きあげているのに比すると、こゝでもやはりまだまだ「璞」である。

以上、要するに文化時代前期の一茶は、内容的にみて、漸く貧苦や孤独、独身の味けなき、都会人に対する地方的な反撥、權威に對する耶揅等の句が目立っている。そしてそこに一茶の個性はあたかも「戰」のようなあやしい花を咲かせている。が、表現面における洗練、特に写声語に関する限り、その真骨頂は次代をまっしてはじめて存分に發揮されているのである。

(未完)